



Title	前号「夏目漱石『吾輩は猫である』縫田針作の材源—小出新次郎の女子裁縫高等学院経営—」についての訂正
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2013, 47, p. 17-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/54420">https://hdl.handle.net/11094/54420</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 前号「夏目漱石『吾輩は猫である』縫田針作の材源——小出新次郎の 女子裁縫高等学院経営——」についての訂正

合山 林太郎

キーワード…吾輩は猫である／夏目漱石／材源研究／訂正

本誌前号掲載の拙稿「夏目漱石『吾輩は猫である』縫田針作の材源——小出新次郎の女子裁縫高等学院経営——」は、『吾輩は猫である』中に記される縫田針作の書簡について、その材源であった資料（小出新次郎という裁縫学校経営者の書籍購入依頼状）を発見したことを報告し、あわせて小出が当該資料を作成するに至った経緯について論述したものであった。

ただ、この論文には、先行研究の調査に遺漏があった。すなわち、藤井亨子氏に「『吾輩は猫である』における縫田針作」（『服飾美学』二五号、一九九六年三月）というご論考があることを見落としていた。

藤井氏は、この論文において、作品中に『裁縫秘術綱要』という小出の著書名が登場することから、縫田針作のモデルが小出新次郎であったことを指摘されている。小出の事跡についても、拙稿では参照しなかった『婦女新聞』な

どを用い、詳細に検討されている。

また、『猫』に描かれる縫田の書簡が、小出の書簡を材源とすることを推定している。具体的に言えば、「〔筆者注：『裁縫秘術綱要』について〕おそらく郵便で直接個人にあてて宣伝したと思われる。その一通が漱石の手許に届き、『猫』第九章に組み込まれたのではないだろうか。」（九五頁）、「私はこの手紙が小出の出したものだと思う。この手紙の真面目腐った、大仰な言葉遣いが、彼の著書に随所に見られる言い回しと酷似しているし、すでにみてきたように手紙の内容を裏付ける事実があるからである。」（二〇〇頁）と記している。

拙稿は、藤井氏が見ておられない実際の小出の書簡を紹介しており、一定の意味を持つものであると思う。ただ、そのなかで「この依頼状〔筆者：縫田の書簡、すなわち、小出の依頼状〕については論じられていない。」（二頁）と記したのは誤りであり、訂正を要する。また、小出の事蹟やそれが『猫』のなかに取り込まれたことについては、藤井氏の論考を踏まえつつ考察すべきであった。調査が行き届かず、適切なかたちの論述ができなかったことを、深くお詫びしたい。

なお、藤井氏と筆者とでは、漱石が、どの程度小出新次郎を認識していたかという点について、やや異なる評価をしているように思われる。

藤井氏は、『猫』中の縫田針作に関する記述について、たとえば、「漱石は小出の名や校名を誇張し更に滑稽味を加えて（しかし小出の事と判る程度に）読者に提供した。読者もあの熱心な裁縫家のこととすぐに了解したのではないか。そして針作となった小出の熱誠溢れる丁寧な手紙を苦沙弥が冷淡に屑籠に捨てる、その落差の大きさにも面白さを感じたのであろう。」（二〇〇―二〇一頁）と論じ、小出に関する知識を前提として、この箇所が書かれ、また読まれたと主張している。また、『猫』執筆当時、漱石はこの手紙や当時の新聞・雑誌から小出の人となり、人並みはず

れた裁縫への熱意の持ち主を見抜いて、その後の小出の浮き沈みを見通していたかもしれない。」(二〇二頁)とも述べ、漱石が、小出の人生について知悉していた可能性について言及している。

拙稿においても、「読者の側から考えた場合、『猫』中の縫田の書状から小出新次郎を想起することは、明治三九年当時においてはそれほど難しくなかったと思われる。」(一二頁、注一四)と述べ、『猫』における縫田に関する箇所から、小出を想像した読者がいたであろうことを指摘している。ただ、小出の書簡の作中への取り込みを、漱石の、小出その人に対する関心の表れと解釈することについては消極的である。すなわち、「小出の依頼状は、それが発信された経緯などが顧みられることなく、その文章の激烈さのみが、滑稽味を醸し出すための装置として『猫』に取り込まれたと想像される。別の言い方をすれば、小出の社会活動が持っていた複雑さは、『猫』の小説世界から排除されているのである。」(九頁)と論じ、小出の生きる世界と『猫』の作品世界との隔たりを強調している。そして、実際に出された書簡をほぼ丸写しすることは、『ホトトギス』の写生文の手法に示唆されたものではないかと述べている。

このような書簡取り込みをどう評価するかという問題については、『猫』中において縫田の書簡とともに言及される華族の書簡についても合わせ考えつつ、今後、さらに検討を重ねてゆきたい。